

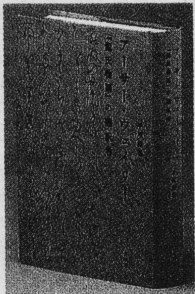
平川 祐弘著

アーサー・ウェイリー「源氏物語」の翻訳者

翻訳成功の秘密探る

翻訳は、異なる言語文化のあいだに橋をかける。アーサー・ウェイリーの名訳という橋があつて初めて、「源氏物語」は「二十世紀英語文学」の傑作と認知され、世界文学の古典となった。著者は、その成功の秘密を探る。西洋文芸の原理が模倣ならば、翻訳もまた、原典の擬態となるだろう。だがウェイリーは翻訳をお能の舞台に託す。複式夢幻能では、ワキの僧の誘いに乗って、シテ

(主人公)が、霊界から現世へと亡霊の姿で渡ってくる。その越境の橋掛りにこそ、翻訳の役割があり、異界の亡霊を成仏させるのが翻訳者(僧)の功德となる。翻訳は降霊術なのだろうか。ウェイリー自身は不可知論者を標榜したが、謡曲の「葵上」への感化が「源氏物語」への関心を目覚めさせたことは確かだろう。六条御息所の生霊が夕顔をのろい殺し、葵上にも憑依する。ウェイリーはそれを深層心理学の「無意識」を借りて現代の読者の目によみがえらせる。その妙技を解き明かす著者は、返す刀で、サイデンステッカー訳「源氏物語」を斬って捨



よっか。ロンドンの文芸界を主導したブルームズベリー・グループ。その

周囲に位置したウェイリー自身、年上の「奇女」ベリルと、ニュージールランド出身の「夕顔」アリスンとに挟まれ、女性の嫉妬に翻弄された。著者はそこに平安朝の恋を重ね合わせ、ウェイリーに「学問世界のShining Prince(光源氏)」を見る。

和漢洋の詩魂が自在に往還し、辛口な批評精神が生動する。著者会心の実践的翻訳論大全である。

《稲實繁美・国際日本文化研究センター教授》

(白水社・四二〇〇円)